

令和元年8月30日

釜石市議会議長 佐々木義昭 様

会 派 名 日本共産党
代 表 者 菊池 孝



会派視察報告書

当会派所属議員による視察調査を下記のとおり実施しましたので、報告いたします。

視察項目 (1) 北海道幕別町「コミュニティバス・予約型乗り合いタクシー事業」について
(2) 北海道石狩市「子ども未来館（あいぽーと）事業」について

日 時 令和元年7月3日～7月5日 (2泊3日)

研修内容 別紙報告書の通りです。



1. 視察項目：コミュニティバス・予約型乗り合いタクシー事業について

日 時：令和元年7月3日（水） 14：30～16：00

参加者：菊池 孝 ・ 坂本良子

相手方：住民福祉部長	合田利信 様
〃 防災環境課交通防犯係長	足利 優 様
〃 防災環境課交通防犯係主査	南 敦朗 様
幕別町議会議長	寺林俊幸 様
副議長	中橋友子 様
事務局長	細沢正則 様
議事課長	半田 健 様

場 所：幕別町役場 3-C会議室

研修内容

幕別町は十勝管内のほぼ中央に位置しており、面積が500Km²で縦に長く令和元年5月末現在で人口26,656人（幕別地区5,641人、札内地区19,470人、忠類地区1,545人）となっています。

コミュニティバスの運行については現在3路線、予約型の乗り合いタクシーは2路線の運行となっています。公共交通機関としてのJRは1路線、路線バスは4路線となっています。

コミュニティバス運行事業について、幕別町では交通機関の課題として、全体では路線バス・JR等を利用できるものの、日常生活に不便を感じる方が多くなってきたことから、町づくりの一環として整備することを目的に取り組んできたということです。

本格運用までの経緯は、平成22年度に高齢者の外出の交通手段の確保を求める陳情を受け、議会の可決を経て平成23年6月に住民を含めた庁内検討委員会が設置され、平成24年7月と11月にはそれぞれ1か月の試験運行を経て、平成25年から幕別線、札内線それぞれ1路線の本格運用が開始されました。その後、平成29年度に実施した町民アンケートの結果を踏まえ、昨年の平成30年10月から、より利便性のあるダイヤ改正が行われたことで、それまで1台で運行していた札内線を1台から2台に増やして順廻り・逆回りの計3路線として運行されています。

また、運行実績は平成30年の利用人数は幕別地区・札内地区の合計が1万5573人と年々増加しており、その要因として、平成18年に沿線路線の住民を対象に行った個別訪問調査や、平成29年度から力を入れている出前講座でのPR活動も実績が伸びた要因となっているとのことです。

予約型乗り合いタクシー運行事業について、その運行目的は幕別町の農村地区における交通手段の確保と、車を運転することのできない交通弱者に対し、郊外地から市街地へ幹線公共交通機関への接続および日常の移動手段として、公共交通サービスの提供を目的に運行を開始したとのことです。

運行路線は2路線、運行に関わるのは町内の2社の事業者で指名競争入札により決定されています。予約型乗り合いタクシーは、平成26年の運行開始から5年が経過し、運行実績は年々増加しているということです。

運行経費についてはコミュニティバスも同様に、年間の総経費から国庫補助金や運賃収入を差し引いた分を町が補てんし、国庫補助金は、国土交通省の地域公共交通（対策維持改善事業費）を活用しているとのことです。

所感

幕別町のコミュニティバスと予約型のタクシー事業の果たす役割の違いについて質問しました。コミュニティバスはあくまでも市街地部分しか走れないという決まりがあり、予約型のタクシーのように農村まで走るのは難しいことから、形態を分けて運行しているとのことでした。

幕別町は、福祉サービスとして、一定以上の身体状況の方、高齢者・障がい者等の方々の外出支援サービスも実施しており、年間2400人位の方が利用されているとのことです。幕別町では、住民の足の確保は十分に行われているように感じましたが、忠類地域というところでは越境という公共交通の制度上の問題などもあり、現在地域住民には外出サービスで対応しながら今後の対策を模索しているということをお聞きし、大きな地域課題を抱えながら努力されている様子などもうかがうことが出来、大変勉強になりました。

2. 視察項目：子ども未来館（あいぽーと）事業について

日 時：令和元年7月4日（木）14：00～15：30

参加者：菊池 孝 ・ 坂本良子

相手方：保健福祉部 子ども政策課主査 川畑 昌博 様
特定非営利活動法人こども・コムステーション・いしかり
館長 伊藤美由紀 様
石狩市議会 議長 加納 洋明 様
〃 事務局長 松議 倫也 様

場 所：石狩市役所会議室

研修内容

子ども未来館は、指定管理者制度により特定非営利活動法人「子どもコムステーション・いしかり」が運営しています。【あいポートの由来】は、石狩市の「I」と石狩湾新港の「ぽーと」を組み合わせることで子供の未来館を港に、来館者を寄港する船に見立てて多くの人に利用してもらえる願いが込められている愛称です。

建設に至った背景には、石狩市の総合保険福祉センター内で開設していた市直営児童ディサービス事業が利用者の増加に伴い施設が狭隘となり、同センター内で実施の児童館のスペースが、同センター行事が多いため使用できる日数が減少し、児童館としての機能が不十分な状態であったため代替施設の確保が求められていたこと、また、建設地区の小中学校内で開設していた放課後児童クラブが同校の特別支援学級児童数の増加に伴い、同クラブが使用していた2教室が必要となり、代替施設の確保が求められていたこと、そして、平成22年度からスタートした次世代育成支援行動計画の後期5ヵ年において、子どもの居場所づくり対策として、特に中高生の居場所づくりが重要施策として位置づけられ、子どもたちが主体的に活動する場を提供することを目的として、これらに対応できる機能を併せ持った大型児童センターとして整備することになったということです。

実施までには、市民の意見を反映させるため、市民会議の設置、パブリックコメントの実施や児童等へのアンケートの実施も行われています。愛称については、子ども未来館だと中高生が入りづらいので、別の名称にしてほしいという意見から、市内の小中学生、高校生を対象に募集を行い、応募総数1121点の中から最終5候補の選定を行い決定されています。

特色のある取り組みとして、小学3年生から高校生で構成される子ども会議

は自分で考え行動し自治できる子どもたちを育てていくことを目指しており、そこではスペシャル縁日や子供祭りなど、行事の企画や日常のルールの検討なども行っています。また、スタジオ会議では、文化活動室（スタジオ）を利用する中学生・高校生のダンス・バンドグループで構成される会議で、施設や楽器・機材の使い方を考えたり、ライブ活動の企画実施も行っています。

今後の課題として、異年齢児童が利用するため、安全で安心して利用できる施設づくりを求める声があり、保護者や地域住民、また、学校等との情報交換などによって、家庭・地域・学校等の関係機関との強固な連携・協力体制を構築する必要があるとのことでした。

所感

石狩市の取り組みは、画期的で全国の自治体からの視察も多いようです。子どもたちが異年齢と関わりながら成長していく様子は、たくましく育つ子供の未来を感じさせるものでした。

様々な計画の中で面白いなと感じたのは、10代のベビーシッター養成講座の企画です。「赤ちゃんをだいてあやして、いっしょに遊んでみましょう！命の暖かさに触れることができますよ。」というのですが、私はそこに関わる子どもたちのところには虐待とは無縁な情緒が育まれていくのではないかと感じました。視察中にも妊娠中の方が施設の下見に来ている様子がありました。

子どもたちの遊び場や活動の環境づくりについて、大震災後の当市の状況と石狩市を比較することは出来ませんが、震災後、遊び場が欲しいという子どもの声がありました。子どもたちが安心して利用できる施設として、石狩市のこども未来館あいぽーのような施設の必要性について話し合う機会をつくっていくことも大事ではないかと感じました。